

のみ、なんぞ舟をくつがへさんや。

〔十六夜日記〕廿七日、明はなれて後、ふじ河わたる、朝川いとさむし、かぞふれば十五瀬をぞわたりぬる、

さえわびぬ雪よりおろす富士河の川風こほる冬の衣手

〔丙辰紀行〕富士川

我國に名を得たる大河はあまたあれど、ことに富士川は海道第一の急流なり、舟に乗て渡るに、わたし守ちからをいだして、竿をさし櫓をおしいだすとき、岸より見るのは、あはやとあやうくおもひ、船中の人は、目まひ魂の消るこゝちぞしける、

往來停馬此踟蹰、天下滔々豈獨吾、河畔爲通名利路、涪陵慙愧一樵夫、

〔東海道名所記二〕富士川は、吉原と神原との眞中なり、大河にして水はなはだはやし。○中略されども往來の人は、利分にはせてこりもせず、いくたびもわたりて、かせぐからに、たゞ山中につみて、木をこり玄ばをかりたるが、心の樂しびはましぇやと、山家のものはおもひぬらん、おとこ、富士川のながれわたりやよの中の人の身過のためしなるらん

〔諸國道中袖鏡〕ふじ川○中略舟わたしなり、船ちん十六文、

〔東海道名所記一〕藤澤より平塚へ三里十六町  
ばにうの渡し、御上洛には舟橋かかる也、

〔東海道名所圖會五〕馬入川

馬入村にあり、むかしは相模川といふ、

〔海道記〕大磯のうら小磯のうらをはるぐとくれば、雲のかけはしなみのうへにうかみて、かささぎのわたしもり、あまつ空にあそぶ、あはれさびしきたびの空かな。○中略さがみ川をわたりぬ